



LGBTのお金と老後に向き合って 特定非営利活動法人パープル・ハンズ



理事 事務局長 永易 至文

1 「性的マイノリティの老後」をテーマとする活動

連日、報道をにぎわす「LGBT」。このところ性的マイノリティに社会の関心が高まっています。しかし、耳や目に届くさまざまなニュースの陰に、性的マイノリティ当事者の生身の暮らしと日々の喜怒哀楽、老・病・死の現実はいそがしに息づいています。そんなあたりまえの現実に立って、NPO法人「パープル・ハンズ」を、仲間とともに運営しています。

当会は、「性的マイノリティの老後を考え、つなげるNPO」としてカフェイベントなどの集いの場の運営、「暮らしと同性パートナーシップの確かな情報センター」として当事者に向けての老後講座や相談の提供、そして社会への発信として介護関係者など高齢期にかかわるセクターへ研修に呼んでいただいたり、冊子を発行するなど、一貫して「性的マイノリティの老後」をテーマに活動してきました。老後講座や対面相談の提供には、ゆうちょ財団さまから長く助成を受け、活用させていただきました。

2 モデルケースのない性的マイノリティの「老後」の現状

日本で性的マイノリティの活動が盛んになったのは1990年代。私（1966年生）も当時のゲイ

の若者の一人として、その渦中を経験しました。

しかし、私たちより上の世代は異性と結婚する生活を送っていました。日本の男性の生涯未婚率（50歳までに一度も結婚したことのない人の割合）は1980年まで2%以下で推移し、また平均初婚年齢は30歳以下。かつて男は30歳までに“全員”が結婚していたのです（女性も少し率が高いものの、同様の傾向です）。

しかし、90年代以後、社会の非婚化もあり、自身のセクシュアリティに正直に生きる人が増え、それから30年後の現在、その人たちが、つまり私たち世代が、老後を迎え始めています。昔なら配偶者や子どもがいるので、「性的マイノリティとして」の老後や終活を考えなくてもよかったです。それは「性的マイノリティの老後」にロールモデルがない、ということでもあります。

現実として性的マイノリティの高齢期には、どんなことが起こっているのでしょうか。（図1参照）

同性ふたりで暮らす人はまだ婚姻できません。同性パートナーに対して病院で、家族でないからと面会を拒否されたり病状説明がない、死に目にも立ち会えなかったということがいまもあります。一方が認知症のとき、もう一方がその貯金をおろすことができるのか。ついに亡くなったとき、突然親族が現れ、マンションや貯金をもっていった。これも同性カップル「あるある」、

図 1

高齢期の課題の例



です。

また、性的マイノリティは出産・子育てといった長い人生プロジェクトを共有する契機に乏しいせいか、短い出会いと別れを繰り返しながら、最終的に“おひとりさま”として老後を迎える人も多い印象があります。むしろこちらが主流でしょう。高齢期の孤立や孤独死、一人暮らしでの認知症などの不安を多くの当事者が心配しています。

ほかにもゲイのなかには、HIV 感染している人もいます。トランスジェンダーには、生まれたときの性別とは違う性別で生きる人もいます。社会の抑圧のなかでメンタルヘルスを悪くしている人もいます。そのため無職や非正規をつづけ、老後を支えるのに十分な経済力がないかたもいます。セクシュアリティが原因で親族と疎遠・不仲や、メンタル疾患で人間関係が乏しい人も少なくありません。

3 FP の学びが当会の設立契機に

私はなぜか性的マイノリティの老後に関心がありました。学校を出たあと出版社に勤め、2000 年代以後はフリーのライターや編集者となるなかで、ゲイの老後を自分のテーマに執筆や編集にあたってきました。あらためてフィナンシャ

ルプランニング技能士の勉強をし（2009 年に 2 級取得）、お金や保険、不動産、社会制度に関する知識を体系的に学んでみると、「世の中はそうだったのか！」「これは使える！」と思える知識がいろいろありました。同時に、「テキストは標準家族一夫婦と子ども 2 人を例にしているが、これがシングルや、法に規定のない同性パートナーとの暮らしだったらどうなる？」「HIV やメンタル疾患を持っている人はどうすればいい？」「非正規が長く老後資金の蓄えがない人は？」など、疑問もつぎつぎ沸きました。

それで、2010 年に「同性愛者のためライフプランニング研究会 (LP 研)」を立ち上げ、生命保険や不動産、親の介護、老後設計など、同性愛者バージョンでライフプランを考えました（『にじ色ライフプランニング入門——ゲイの FP が語る〈暮らし・お金・老後〉』2012 年に結実）。

そして、だんだんコアメンバーが集まり 2013 年に老後問題に取り組む足場として NPO 法人パープル・ハンズを設立。また、私自身も公正証書の作成など法律家としても具体的にサポートできることがあると思い、行政書士資格をとって事務所を開きました。今年（2023 年）、ともに満 10 年を迎えました。

現在の理事には、クリニック医師、社会福祉士・介護福祉士、退職教員らが参加し（いずれも性的マイノリティ当事者）、介護関係者への啓発や、当事者の集いの場運営など、それぞれの経歴を活かして活躍しています。

4 お金と社会制度の知識をきちんと学ぶ

当会の旗艦活動は創立以来、性的マイノリティのための老後ライフプラン講座です（図 2、3 参照）。お金と法律、社会制度について学び、まずはいまの制度を使って生活の安定を図ることを目的としています。その点で、「うちは“支援団

図2



図3

当会で作成した「お金」「同性パートナーシップ」「終活入門」の3テーマの小冊子に合わせたオンライン講座を開催します。おひとりさま、同性ふたり暮らし、HIVや病、障害があっても、性別を変えても、自分らしく暮らすための知識が満載。若い方にも、シニアの方にも、ぜひご利用ください！

LGBTQのための人生プランニング情報講座

第2水曜 午後8時半～9時半過ぎ

「私たちが性的マイノリティが老後のためにできる10のこと」
「終活ガイド」
「同性パートナーシップ」

12月14日(水) 40代までに知りたい お金と社会制度の知識
計画的な貯蓄と借金のない暮らし、保険と不動産、社会保険など制度の知識について、セクマイの現状を踏まえて解説。

2023年1月11日(水) 同性パートナーと安心して暮らすために
終活制度による保証がない同性ふたりの暮らしについて、その現実や起こりうるトラブルとともに、解決法の例を。

2月8日(水) セクマイ版おひとりさま終活入門
家族による見守りが期待できない性的マイノリティの高齢期について、自宅でも安心して旅立てるための準備を。

講師：永島至文 パープル・ハンズ専務局長、行政書士、2級FP技士

※お申し込みは下記「イベント」のページからご登録ください。シーズン中毎回の開催案内がきます。ご関心にあわせてご受講ください。途中からの申し込みも歓迎します。 ※ZOOMをダウンロードください(無料版でも可)。前日にアドレスやpdf資料をお送りします。 ※受講日に、講義と質疑応答を行います。講義部分はアーカイブを後方方向で調整中です。 ※この講座は、一般財団法人ゆうちょ財団さまの「金融相談等活動助成」をいただき、無料で開催しています。

※お申し込みや詳細は、こちらの「イベント」のページから、コードが読み取れない場合は、当会ツイッター等をご覧ください。

性的マイノリティの老後を考えつなげるNPO
特定非営利活動法人 パープル・ハンズ 電話 03-6279-3094 メール info@purple-hands.net

コロナ以前は貸し会議室を利用して開催。その後はオンラインで開催し、全国から受講していただけるようになった。当会のYouTube（パープル・ハンズで検索）にも講座の様相をアップしている。

体”ではない。必要な知識を学ぶ“学びの場”、いわば“社会教育団体”である」と言っています。

NPOの性質上、当会がターゲットとしているのは、裕福ではないが、生活保護まではいかない人たちです。現金や貯金が乏しく、お金のやりくりが一番苦しいかたが、年収300万円の家を失わないで老後までなんとか生き延びるにはどうするか。必要なのはお金や福祉制度についてきちんと情報をもつ「制度リテラシー」ではないでしょうか。

福祉制度は一見、複雑でかつ申請主義です。また、お金の課題は本人がつい目をそらしたり、多くの支援団体・支援者も苦手とするようです。しかし、自分の収入を見きわめ、支出を見直し、将来に備えて貯蓄し、借金をしないことは、セクシュアリティを問わず誰にとっても大切なことです。“恒産なければ恒心なし”は、マイノリティの生きづらさを解消するうえでも必要な視点でしょう。

私たちは、そうした“理財の道”を学び、性的マイノリティという共通する境遇で視点や実情を交流（ピアエデュケーション）する機会を提供することを第一のミッションにしています。

- 講座では毎回アンケートをしています、
- ・頭ではなんとなく考えていたことをスッキリと順序立てて説明いただき、わかりやすかったです。
 - ・大変参考になりました。まずは貯金、自分の収支を再度見直す良いきっかけとなりました。LGBTQ向けの講座を初めて聞いたのですが、こんなにストレスフリーに聴けるとは……。次回の講座も受けたいと思います。
 - ・このような素敵なセミナーを無料オンラインで聴けること、ありがたいです。とてもわかりやすく、勇気もいただきました。パートナーと一緒に聞くこともでき、楽しかったです。

・とてもわかりやすく聴きやすかったです。将来に対する漠然とした不安がなくなるわけではありませんが、前向きになれる内容でした。

といった声を多数いただいているのは、ありがたいかぎりです。

お金や金融教育は、現在、学校でも取り組みが始まったり、FP 専門誌でも記事が組まれたり、さらに昨今は銀行・証券・保険会社等でLGBTをターゲットとしたセミナーや営業企画も見られるのは、社会の変化を実感させられます。その一方、投資や運用を煽り、無用な金融商品を購入させられないか、若干の懸念もあります。金融教育と消費者教育のバランスのとれた展開を願うとともに、当会での「お金の学び」の原点をつねに確認しつつ、今後も取り組んでいきたいと考えています。

5 書き込み式で老後が見えるLGBT版『エンディングノート』

さて、当会が満10周年を迎えたということは、私をはじめメンバーも10歳、年を取り、性的マイノリティの高齢化をめぐる課題はいよいよ切実になってきました。私たちはどんな老後を送るのか？

先述したように、子どもをもつことが少ない性的マイノリティの老後は、“おひとりさま”の老後に重なります。当事者からは、とかく「ゲイの老人ホームがあったらなあ」という声も聞きますが、LGBT専用老人ホームに乗り出す企業はまだ見かけません。そもそもゲイの老人ホームが老後の孤立の解決になるのかはわかりません。

ただ、一人暮らしで親族縁に乏しい高齢者の、入院時や認知症時の世話、死後の火葬・埋葬や死後事務を、誰が、どう行うのかは、性的マイ

ノリティに限らず一般社会でも「身寄りなし問題」として深刻さを増しています。なんでも「家族」というブラックボックスに投げ込んで対応してもらおう時代は終わろうとしています。

当会では老後の住まい方として、「べつべつに、みんなで暮らす」と言っていますが、一人暮らしで自立しつつ、同時に引きこもらず、地域の公的資源やネットワーク（当会も含め）につながることを提唱しています。当会としても、行政や地域関係者に、性的マイノリティをはじめ多様な住民がいることを啓発し、その受容性を高めていくことがこれからの課題でもあると考えています。

もちろん、当事者側もいたずらに自身を不幸がらず、みずから備えていく姿勢は必要でしょう。政府が言う強迫的な「自助努力」とは別の意味で、当会でも愚直に講座や相談で当事者目線の情報を伝え、自分の足腰を強くしていくことに尽きます。

いま考えているのは、性的マイノリティ版の『エンディングノート』です。市販のものも多種ありますが、「家族へのメッセージ」など、性的マイノリティには不要だったり、ときに寂しく感じるページもあります。性的マイノリティの実情に即した項目を書き込んでいくことで、自分の現状や考えが（お金も含めて）整理でき、万一時には必要事項を必要な人に伝えられるものがほしいな、と思っています。

ゆうちょ財団さんにはこれまで講座等で、規定の年限以上にわたって特別にご支援いただき、これ以上のご無理をお願いすることは難しく（苦笑）、また別の助成先を探していくことになりましたが、これからも末長くお見守りいただくとともに、本誌をご覧の関係者のみなさまにも、こうした団体もあることをお心に留めていただければ幸いです。